

# 国際環境 NEWS LETTER

No.3

SEPTEMBER, 1974

## I 海外学術調査雑感

### ボルネオ雑感

中嶋嶺雄(総括班)

一時の中国ブームが鎮まりかけると、東南アジアにたいする関心がにわかを高まってきた。今日、東南アジアは、ちよつとしたブームになっている。日本人にとって、もつともエモーショナルな感興を呼びおこす中国への期待や悪しき郷愁が思いどおりにならないことがわかってきたためであろうか。

ところで私自身、「国際環境に関する基礎的研究」の昭和48年度海外学術調査計画の研究代表者としてこの3月の春休みに、東南アジア諸国をまわってきたばかりである。私の前回の東南アジア訪問は、日中国交にたいするアジア諸国の反応を知るために出かけた1972年秋であり、その前はインドシナ情勢がもつとも緊迫していた1970年5月であつたが、1年半のブランクののちの今回の旅行は、やはり印象深いものであつた。今回は、かねてからの懸案であつたボルネオ(東マレーシア)のサラワク州、サバ州へも足をのばしたが、それは、マレー人と中国人の複合構造をもつ多元民族国家マレーシアにおいて、華僑の社会的存在が中国をめぐる今日のような国際環境の変化のなかでどのような意味をもつかを知るためであつた。それらの調査結果については、いずれ別の機会にゆづらねばならないが、第二次大戦中は日本の占領下にあつたこの地も、1963年に英領を脱して以来、マレーシア連邦の1州になっている。だが、この地を訪れた者なら誰の眼にも明瞭なことに、いたるところ中国人が実に多い。私がボルネオ第一の都市でサラワク州の首都でもあるクチンに着いた日はちょうど鳳山寺の広

## ~~~~~主要記事~~~~~

I 海外学術調査雑感 .....	1
ボルネオ雑感(中嶋嶺雄) / Dr. Sanjeli and Her Assistants (平野健一郎) / 中央アジアの旅(坂本是忠)ほか	
II 研究成果中間報告 .....	16
東南アジアにおける民族独立運動(市村班中間報告)	
事務局ニュース .....	19
(A)第2回シンポジウム実行委員会の決定事項	
(B)昭和49年度第1回研究代表者会議の決定事項	
(C)総括班購入図書を選定委員会	
(D)第1回報告者合同研究会及び打合せ会	
(E)昭和50年度シンポジウム準備委員会	
(F)昭和49年度海外学術調査	

沢尊王のお祭りで、クチンの街中をあげてドラや太鼓が鳴りひびき、龍の踊りや西遊記、楊貴妃などの山車が潮州公会とか福州公会とかの中国人の同郷会や宗親会ごとにくりだされて大変な賑わいであつた。夕陽迫るころは、善男信女が手に手に長く太い線香をかかげて行列して街を通りぬけていったが、このようにボルネオの地においても中国文化は排他的に根強お自己主張している。かつてサマセット・モームが1922年にこの地を探訪して『作家の手帖』のなかに印象的に描写したサラワク河口に位置する港市のクチンのみならず、サラワクの主河ラジャン河に沿つたボルネオ奥地のシブの街も、街のなかは中国人街であり、住民も中国人が圧倒的に多い。もとより、これら中国人がローカル経済の実権を握っている。中国人は客家、福州人、福建人、潮州人の順であるが、このような現実のなかに今日のマレーシアは多民族複合国家としてあるのである。因みに1966年の人口統計によれば、サラワク州の総人口86万のうち、中国人が32.7パー

セント、原住人であるイバン族（海ダヤ族）29.4パーセント、マレー人17.9パーセント、陸ダヤ族8.2パーセントとなつていて、中国人が断然第一位である。

サラワクで注目すべき最近の事件は、これまでしばしば現地政府を悩ましていたサラワク・ゲリラの一派が、昨秋以来、そのリーダーをはじめとして大量投降したことであつた。インドネシア9・30事件で潰滅したといわれたPKI（インドネシア共産党）の残存分子がカリマンタン（インドネシア領ボルネオ）に潜んでいて、その影響もあつて根強かつたといわれたサラワク・ゲリラの投降の理由はまだ必ずしもはつきりしていない。だが、これらのゲリラもすべて中国人なのである。ここにも、アジアに広がる「中国の影」がアジアのローカルな現実においては、いかなる陰影をもっているかが示しだされているといわねばならない。私は、この問題についてかねてから関心をもっていたが、現地で入手したローカル新聞（『山打根日報』1974年3月17日）に、サラワク州政府副首席・楊国斯のサラワク共産ゲリラ掃蕩に関する長い談話が載っていたのは、この問題についての情報が少ないだけに収穫であつた。それによると共産ゲリラも州政府も「为人民服务」という点で一致するようになったのだというのだが、この辺の事情がこのたびのマレーシア・中国の国交樹立に一つの背景として作用していただろうことは否めない。

私は、クチンから22キロ南へジャングルを入つたスグ村の陸ダヤ族が住む高床長屋も探訪し、かつては首狩り族だつたダヤ族が（それゆゑに彼らは他部族の襲撃にそなえて、集団で竹製の高床の長屋〈Long House〉に住む）今日、文明の波に洗われて狩猟生活から定着の焼畑農耕さらに陸稲の栽培にまゐたり、男はクチンの工場に出稼ぎに行っている者が多いことを知つたが、クチンのサラワク博物館付属インフォメーション・センターに働く流暢で正確な英語を話す美しい案内嬢に陸ダヤ族だと自己紹介されて、むしろこの中国人の方がはるかに伝統的・守旧的であることを実感せざるを得なかつた。マレーシアと一口にいってもこのようなローカルな現実がそこには活きているのである。

（筆者は東京外国語大学助教授）

## Dr. Sanieł and Her Assistants

平野 健一郎（衛藤班）

本国にならう電力制限のためか、ロビーに一つも電灯の点つていない香港の啓徳空港を發つて、マニラに到着したのは73年の12月27日夕刻であつた。香港の空港では、チェック・インの時に、折しもマニラ近郊で開催されるジャンボリーに参加するガール・スカウト諸嬢の囁りにとり囲まれ、そのせいか、マニラ到着の夕食から胃に変調を覚える敵目となつた。余りにも人の多い香港から解放されて、マニラへ向う機上で読んだフィリピンのBulletin Today紙は、日本が調印13年後によりやく日比友好通商航海条約に批准する決定を下した旨の（つまり、フィリピン側も批准することに同意したと思われる旨の）日本の新聞の記事を一面に大きく訳載していた。

マニラ訪問の目的は、フィリピン有数の日本研究者として紹介して頂いたDr. Tosefa Saniełをフィリピン大学アジア・センターに訪ねて、留学生問題、日本語教育、日本研究を中心とする日比文化交流について、その意見を伺うことであつた。前もつて来訪の意を東京から手紙で伝えてあつたので、ホテルに到着早々電話で具体的なアポイントメントを取ろうとしたところ、電話帖をあちこち繰つても、オペレーターに助けを求めても、どうしてもそれらしき人の名が見つからず、翌朝大学のインフォメーションに電話をしても、休暇のせいか応答がなかつた。

そこで、思い切つて、とにかくフィリピン大学アジア・センターへ出かけてみることにし、お昼すぎ、雨もよいのデ・ロス・サントス通りをケソン・シティまで、ぎしぎしきしむ旧型ダットサンのタクシーを走らせた。大学のキャンパスはとてつもなく広大であつた。それでなくても休暇でまばらな学生をつかまえては、親切な運転手と一緒にアジア・センターへの道案内を請うても、定かな答えは返つてこなかつた。それもそのはず、20分近くもタクシーでさまよつた挙句、ようやく発見したセンターはキャンパスの隅に、まだ工事の骨組みさえない状態で存在していた。工事現場の